PROJECT

なぜいま再分配の人類学なのか

文
浜田明範

共同研究【若手】● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究──手続きと多層性に注目して（2013-2015）

本共同研究の目的は、再分配を人類学の主題として再生させることにある。この目的を達成するため、本共同研究では世界各地で行われているさまざまな規模の再分配に注目し、細かな手続きの差異とそこで生成される集団の関係について比較検討を行っている。それにしても、なぜいま再分配なのか。人類学で再分配について議論する意義はどこにあるのか。多くの方が抱くであろうこの疑問に答えるため、以下では、人類学における再分配をめぐる状況と再分配に注目する今日的な意義を紹介することにしよう。

経済人類学の忘れられたトピック

互酬や市場交換とともに、経済活動の一類型としてポランニーによって定式化された再分配は、マリノフスキーによる古典的な研究に代表されるように、人類学の黎明期から重要な主題のひとつであった（ポランニー 1980［1977］：88-102; マリノフスキー 1967［1922］：117-138, 197-213）。しかし、贈与や貨幣や市場に関する研究が大輪の華を咲かせる一方で、再分配については 1970 年代以降ほとんど進展のないまま留まっている。もちろんこのことは、人類学者が再分配に遭遇しなくなったことを意味しない。にもかかわらず、人類学者が再分配について正面切って論じなくなった理由はどこにあるのか。

再分配は互酬や市場交換と比べて、個別的なやり取りがいかに社会の持続の役に立つのかという構造機能主義的な発想と親和性が高い。そのため、人類学における構造機能主義の衰退とともに再分配研究も姿を消すことになったというのは、ひとつの説明の仕方である。あるいは、サーリンズが指摘したように、再分配は「一般化された互酬」の一種と考えることができるため（サーリンズ 1984［1972］：223-285）、独立した様式として検討する必要がなかったとも言えよう。ポリティカルエコノミーの隆盛を鑑みれば、「南」で調査をすることの多かった人類学者にとっては、ひとつの集団内での再分配よりも集団間・国家間の富の不平等こそが注目すべき課題だったのかもしれない。これらの説明はどれも一定の説得力を持っており、人類学で再分配について語ること自体にもはやそれほどの重要性がないようにも思える。

しかし、答えはもっと別の所にあるのかもしれない。集団と親和性が高いことは再分配について研究する意義を補強する材料ともなるし、再分配は必ずしも互酬に完全に包摂されるわけでもない。貧困や不平等について検討する際にも、多様なレベルでの再分配に注目する意義はけっして完全に失われていない。そうであるならば、再分配について人類学的に議論する余地は十分に残されていることになる。にもかかわらず、近年の人類学で再分配についての言及がほとんどないとするならば、それは単純に流行の問題のようにも思えてくる。文字通り、再分配は忘れられていただけではないのか。

ここ 30 年の経済人類学の動向を念頭に置くならば、「忘れられていた」という主張もそれほど的外れではないように思える。ストラサーン（Strathern 1988）によって先鞭を付けられた、贈与における形式の美学的効果に注目するメラネシア交換論の成果は、芸術や開発といった分野にまで拡張され現代人類学を席巻している。他方で、ラトゥールのアクターネットワーク論とフーコーの装置論に影響を受けた市場研究は、市場を所与のものとしてではなく、さまざまなモノや制度の配置を通して立ち上げられるものとして捉えるようになってきている（Callon 1998）。

これらの贈与や市場についての研究は、特定の形式や配置を記述したうえでそれがどのような効果を持っているのかを問うという特徴を持っている。もはや、贈与や市場はあらかじめ確固としたものとして存在すると考えることはできない。特定のモノの取り扱い方やそれに付随する言葉づかい、モノの配置といった具体的な手続きの結果として、贈与が成功したり、市場が成立したりするというのである。

ガーナ南部では現金が贈り物とされることも珍しくない。写真は、オマーン・アフォリボと呼ばれる収穫祭で人々から集められた現金。多数の参加者が集まり、70 円程度の小額紙幣から 15000 円程の大金まで、思い思いの額が拠出され、町の発展のために用いられる（2013 年 12 月、プランカシ町、浜田明範撮影）。

同じことが再分配にも言えるのではないか。具体的な手続きに注目することで贈与や市場についての研究が活性化したのならば、同じことが再分配についても可能なのではないか。そうであるならば、人類学における再分配の再検討はずっと以前に行われるべきだったのかもしれない。これが、本研究会が組織された最初の動機である。

「社会的なもの」への期待

ひとたび人類学の外部に目を向けてみるならば、再分配に対する注目はむしろ高まっている。日本の政治においても「税と社会保障の一体改革」という言葉が消費税の増税と絡めて繰り返し言及されたが、これは日本社会というひとつの集団における再分配のやり方を再構築する試みに他ならない。

近年、頻繁に耳にするようになった格差の問題も国家レベルでの再分配に関する問題として考えることができる。

人文・社会諸科学においても、再分配は主要な論点のひとつとして再注目されつつある。政治学者のフレイザーはアイデンティティ・ポリティクス全盛の時代においても政治的課題としての再分配の重要性が失われていないことを明快な論理で示し、国家レベルでの不公正な配分を是正していくための指針を提示する、影響力の強い論稿を発表している（フレイザー・ホネット 2012［2003］）。

同時に、グローバル化や新自由主義の進展に伴って市場原理の波に個々人が直接的に曝されることが危惧される中で、「社会的なもの the social」をめぐる議論も活性化している。「社会的なもの」は必ずしも再分配に限定されるわけではないが、福祉や連帯を実現するための主要な手段として再分配が想定されていることは間違いない。本研究会のメンバーでもある高橋絵里香（千葉大学）は、このような市場に対抗するものとしての「社会的なもの」への注目の増大を、「『社会的なもの』への期待」という印象的な言葉で表現している（高橋 2013：9-14）。

ガーナのダゴンバにおける落花生の収穫分益。時には 100 人以上の女性と子供が 1ha 程度の畑に収穫を手伝いに押し寄せる。報酬は、一般的な賃金の相場よりはるかに良く、原則的には収量の 4 分の 1 が取り分になる。写真は収穫後、生産者の家にて 4 分割しているところ（2010 年 9 月、フィヒニ村、友松夕香撮影）。

「社会的なもの」への期待は、初期資本主義との対比で再分配や贈与に注目していたポランニーやモースの再評価という形でも表れている。両者の著作の新訳がつぎつぎと発表されているのは、そのもっともわかりやすい証左である。また、ギルド社会主義者としてのポランニーを再発見する優れた著作を上梓した若森（2011）は、ポランニーの再評価は世界的なブームとなっていると述べている。思想史家の重田（2010）は、フランスの連帯主義の系譜をたどることで、顔の見える関係における再分配としての協同組合や相互扶助が市場への対抗手段としてどのように成立していったのかを跡付けているが、これも同様の流れの一部と位置づけることができるだろう。

人類学の立場から眺めると、これらの研究にはどこか物足りなさを感じるところもある。フレイザーの議論は再分配が行われる単位としての国家を所与として扱っているきらいがあるし、「社会的なもの」をめぐる議論は市場に対抗するための役割を過剰に再分配に担わせてきたように見える。思想史的な研究は、どうしても欧米の事例に偏ってしまう。端的に言えば、再分配という言葉で指し示す内容を、その規模や時代や地域に関して狭い範囲に限定しすぎているように見えるのである。

先述のように、再分配は贈与や市場と並ぶ経済活動の一類型であり、そこには租税や福祉、連帯といった言葉で想起されることよりもはるかに多くのことが含まれている。ポランニーの言葉を借りるならば、「祭典、儀礼的な食物再分配、宗教上の儀礼、埋葬の饗宴、公式訪問、収穫、その他の祝い事」も再分配の機会と見なしうるし（1980［1977］：96-98）、サーリンズに倣うならば、家族内での食物寄託や集団の営為としての狩猟や漁撈、戦争、交易、公共建築物の建設といったこともこれに付け加えることができる（1984［1972］：227-228）。

これらの多様な現象を視野に入れながら、あらためて再分配と集団の関係について議論することは「社会的なもの」に関する研究にも大きく貢献することになるだろう。「社会的なもの」の形すら想像しづらくなっている現代日本では、世界各地からの事例を通じて具体的なイメージを提供したうえで、それを通して思考を紡いでいく人類学の貢献こそが求められている。本共同研究は、その第一歩を印そうという、過分に野心的な試みである。

【参考文献】

Callon, Michel (ed.) 1998. *The Laws of the Markets.* Blackwell Publishers.

フレイザー, ナンシー・アクセル, ホネット 2012［2003］『再配分か承認か？：政治・哲学論争』加藤泰史監訳、法政大学出版局。

マリノフスキー, ブロラウニ 1967［1922］「西太平洋の遠洋航海者：メラネシアのニュー・ギニア群島における、原住民の事業と冒険の報告」寺田和夫・増田義郎訳『世界の名著 59：マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』pp. 55-342。

重田園江 2010『連帯の哲学Ⅰ：フランス社会連帯主義』勁草書房。

ポランニー, カール 1980［1977］『人間の経済Ⅰ・Ⅱ』玉野井芳郎・中野忠訳、岩波現代選書。

サーリンズ, マーシャル 1984［1972］『石器時代の経済学』山内昶訳、法政大学出版局。

Strathern, Marilyn 1988. *The Gender of the Gift: Problems with women and problems with society in Melanesia.* University of California Press.

高橋絵里香 2013『老いを歩む人びと：高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』勁草書房。

若森みどり 2011『カール・ポランニー：市場社会・民主主義・人間の自由』NTT 出版。

はまだ あきのり

国立民族学博物館機関研究員。専門は医療人類学、アフリカ地域研究。ガーナ南部のカカオ農村地帯を対象に生権力と統治について研究を行っている。共著に『カルチュラル・インターフェイスの人類学』（新曜社 2012 年）、論文に、「医療費の支払いにおける相互扶助：ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75(3)（2010 年）など。